

熱中症と頭痛

よく使っていて大丈夫な薬でも、意外な副作用が出ることもある。

56歳のA子さん。若い頃からの頭痛もち。よく、こめかみあたりが締め付けられたように痛む。「緊張性頭痛」と診断され、使う鎮痛剤は決まっている。

今回の受診は、いつもとは違う頭痛が起きたからだ。前日、暑い中、3、4時間外出した。「熱中症は大丈夫か」と思いながら帰宅したが、家の中も蒸し暑い。何となく、貧血を起こしたようにふらふらして、だるい。そのうち、頭がズキズキしたのではないか。すぐにいつもの鎮痛薬を飲んだと言う。ヤバイ。「でも、痛み止めは効かなかったでしょう?」と聞くと、Aさんはうなずく。体を冷やし、水分補給をして、1、2時間くらいしたらようやくへ、「頭痛のほうも軽くなったが、まだすっきりしない。ひょっとして、頭の中?」と不安がる。が、ない、ない。熱中症をおこしかけただけだ。

もっとも、熱中症で頭痛がするというと、もはや軽症ではない。治療が必要な中等症のレベルだ。その頭痛は、ひとによって訴え方がさまざまである。これが熱中症

の頭痛の特徴だというものはない。だから、Aさんのように、暑い中において、ふらふらして、頭が痛いようなら、まずは熱中症を考えたほうがよい。すぐに、水分補給と体を冷やすことだ。

頭痛がするからと言って、安易に鎮痛剤を飲んではいけない。熱中症による頭痛に鎮痛剤は効かないだけではない。よく鎮痛薬を飲む人が、脱水時に鎮痛薬を飲むと「横紋筋融解症」が起こりやすいという。腎不全や致命的な不整脈の原因になる。怖い病気だ。

この暑い夏、頭痛が多くなる患者さんもいる。痛いから、とにかく薬で抑え込もうというのは、無茶というもの。まずは、原因を考えてからにして。

(石黒修三「いじへろくにニック・脳神経外科医」88北國新聞掲載)